

第3回

工藤 廣雄 氏

支援の現場から見る 法の「現実」

取材担当：神谷茉里、執行治平、長川美里 (RJIFインターン)



Photo : RJIF

略歴：医療ソーシャルワーカーとして生活困窮者の医療相談職に従事。その後、社会福祉法人神奈川県匡済会が運営する「南浩生館」に入職。入職後、同館館長や、ホームレス一時生活支援事業「まつかげ宿泊所」施設長、横浜市ホームレス自立支援施設「はまかぜ」施設長を務めた。2015年4月からは、法的根拠を生活困窮者自立支援法に移し、「はまかぜ」施設長を歴任。法人の理念に共感し、長年生活困窮者の支援に努めている。

路上生活者の支援に携わるようになったきっかけを教えてください。

僕は東北の生まれで、今年70になります。僕の時代は集団就職があって、地方の次男や三男は都会へ働きに来ていました。僕もその一人で、福祉病院で医療ソーシャルワーカーとして働いていました。そのとき、寿町¹の人たちが酔っ払って喧嘩して、病院へ何度もやってきていたんですね。「どうしてこっちが一生懸命看護しているのに、同じことをまたくりかえすんだろう」という疑問が、こういう活動と関わるきっかけになりました。

¹ 自立支援施設「はまかぜ」のある横浜市中区の町。戦後、港湾労働・建設業などの現場ではたらく日雇い労働者たちが集まり、簡易宿泊所が形成された。東京都台東区山谷、大阪のあいりん地区と並び「三大ドヤ街」と呼ばれることもある。

28, 9歳くらいのときに、同じ市内の南浩生館²にて住み込みで働かないかという話がありました。やっていたのは相談員です。他にも、入って来た人の髪の毛を（もちろん本人の承諾を得て）バリカンで刈っていました。横浜スタジアムの内野席数（約5000人）を目標にしていたら、結局7000人も人の頭を刈ることになりました（笑）。

寿という町は、どのような場所なのですか？

ドヤ街や、簡易宿泊所の生活保護者受給率の高さなどのイメージが先行してか、周囲からの偏見や差別が厳しいところです。酔っ払いがいる、ホームレスがいる、薬物がある、暴力沙汰が起こる……って、いろいろなことで揶揄されてきました。僕は、この町とともにずっとそう言われ続けるのを見てきました。しかし、この町はもともと、現在の横浜の繁栄を築き上げた日雇い労働者や、その家族がつくりあげた町なのであって、これらの人々がいなければ現在の横浜はなかったのです。差別や偏見はぜひやめてください。



そこで支援を続けている「はまかぜ」の活動について教えてください。

現在（2015年4月以降）は一時生活支援施設として、各区の福祉保健センター窓口や夜間の巡回などを通じて、一時生活支援事業の利用決定者を対象に、利用許可を出して利用してもらっています。利用者は生活支援のほかに就労支援を受けることもできます。利用する人は、原則3ヶ月から最大6ヶ月まで、施設で過ごすことができます。その前は、ホームレス自立支援施設として運営していました。

² 住居を持たない勤労者に対し宿泊場所を提供するとともに、自立を支援する施設。昭和43年、横浜市に開設された。平成14年閉鎖。運営母体は「はまかぜ」と同じく、社会福祉法人・神奈川県匡済会。匡済会は、大正7年の米騒動をきっかけに生活困窮問題の支援を目的として設立され、創立から98年、基本理念を「あらゆる人の尊厳を守り、常に人が人として、文化的生活が営めるよう、その自立に向けた支援に努める」と定め、一貫して生活困窮問題に取り組んでいる法人である。

職員が公園や駅前を夜間に巡回して、路上生活者などがいたら「はまかぜ」に案内します。路上生活者の中には、「これからどこへ連れて行かれるんだろう」と不安に思う人は多いです。だから、この人たちにもいろいろな生き様があって、施設に来ざるを得ない状況になっているということをきちんと受け止めて関わるように、と僕は職員に話しています。

路上生活者というのも様々で、巡回相談をしても3分の2は来ません。「自分でやるぞ」という意識がある人もいるし、自分を路上生活者だと思っていない人もいます。悪質な簡易宿泊所を使って困窮者を囲い込んで、生活保護を搾取する貧困ビジネスだってあるから、それを警戒している人もいます。

ちなみに厚労省によると、路上生活者の数は減っています。もちろん、路上生活者への支援を続けてきた身としては嬉しいですけど、路上から消えたかわりに貧困ビジネスに囲われている人たちもいるという状況です。そういうことは、いまだにあまり知られていません。

行政との関わりはどうでしょうか。

生活困窮者とか社会的弱者……このような呼ばれ方をされてしまう人たちを支えるためのネットワーク作りが始まっています。僕たちのような施設や病院などが、それぞれの役割を補いあうかたちで横断的なネットワークを作ろうとしている。でも個人情報共有という面で難しい部分も結構あって、それはこれからの課題ですね。



Photo : RJIF

事業の中で課題や、今後問題となりそうな点はなんですか。

ひとつは、自立後のことをどうするかです。というのも、施設から出て寿町を去った後、また戻ってくる人もいますからです。はまかぜから自立した人たちが、寿町にいる間とりたてて近所づきあいもせず誰とも口も聞かないような生活をしていたとしましょう。そういう人が、他の場所に行って生活するということは、思っている以上に難しいことなんです。

戻ってきた人に理由を聞くと、「仕事は一生懸命やっていたのだけれど、近所づきあいがうまくいかず孤立してしまった。寿町にいるほうが、よっぽどよかった」って言うんですね。よその町でのゴミ出しルールを知らなかったり、地域づきあいに入っていくことに困難を覚えたりといったことが、施設を出てから自立をした後で問題となってきます。

また今後、悩みとして考えられるのは、高齢化の中で認知症の疑いのある人をどのように受け入れるかです。受け入れる以上、彼らの行動による結果には、施設として責任を負うこととなります。それはある意味、リスクでもあります。しかしそういう人を排除したら、その人たちの行き場はなくなってしまいます。

「はまかぜ」が大事にしている点がありますか？

もし自分が同じ状況に追いやられたときに、なにを一番求めるか、というのをずっと考えています。たとえば食事。路上生活をしていた人に健康診断をして、カロリー制限をしてもらうんですが、とりあえず、最初は食べてもらう。だって最初から食事制限すると、「なんだよ、こんなところ来たくないよ」という話になっちゃう。それは避けたいから、まずは本人が望むように食事を出してあげる。胃袋が落ちついてから、そこで食事制限などの具体的な対応をします。

それから就労をしている人に、食事代として一日1000円を渡すことにしています。一銭もない状態で会社に採用されても、昼休みに肩身の狭い思いをすることになるわけですから。こういうなんでもないようなことが大事で、それを行っているのは「はまかぜ」のよさですね。

“自分が同じ状況に追いやられたときに、 なにを一番求めるかをずっと考えている”

ホームレス自立支援施設から一時生活支援施設として、求められる役割が変わったという点で、昨年度施行された生活困窮者自立支援法の影響は大きかったと思います。

この法律を、工藤さん自身はどのようにお考えですか？

利用者に関わる立場としては、この法律ができたことが生活困窮者にとってほんとうによかったのか、疑問を持ちかけ始めているというのが正直なところです。現場に関わるものから見ると、一律の事業運営・報告が求められることが欠点にあげられます。

ホームレス自立支援施設としての「はまかぜ」は、最低1ヶ月、最長で1年の利用が可能だった。1ヶ月としていたのは、限られた期間を自覚して、無為に施設で過ごしてほしくなかったからです。けれど、一時生活支援施設になってからは一律での運営が求められたので、現在の期間（3ヶ月から6ヶ月）にせざるをえなくなった。

それから、困窮者自立支援法が成立してから、相談支援事業で標準化された質問票に基づき利用者への聞き取りをすることになりました。ときには過去のことも質問しなければなりません。でも、相手について知ろうとするときその人の過去について尋ねるとするのは大事なことだけれど、それを単に一律の質問票を作ってやるのが本当の支援につながるか、というと疑問です。過去のことを語るというのは、ある程度の信頼関係ができてやってもらうべきで、さもなければ、相手の心を閉ざしてしまうかもしれない。

今までの方と比べて法律に対し厳しい意見をお持ちのようですが、この法律を数字で評価するとしたら、いくつでしょう。

僕には点数化はできません。大切な法律ですけど、完璧な法じゃないと思う。生活が苦しい人たちを生活困窮者と定義するくらいだったら、その前にもっと既存の法律を重装備すべきじゃないか。生活保護法が、健康で文化的な最低限度の生活を保障にする法律だったら、この自立支援法は、もっとその上を目指すべきだ。今までは最低限度の生活を営む権利を確保するために生活保護法があったのに、そちらを見直す一方で、自立支援法は保護まで行かない人たちを支援するんだよね。僕は矛盾しているような気がする。法律を作った人たちは「制度の狭間」を救うとか言っているけれど、それは単なる言葉遊びじゃないのかな。



“言葉遊びしていませんか？”

若い人に対して、これだけは伝えたい、というメッセージはありますか？

差別偏見をしてはいけない、ということです。1982年から83年にかけて、横浜市で路上生活者を襲撃した事件がありました。加害者の子どもたちは、「ゴミのような浮浪者がうろうろしているので俺たちが清掃した。何が悪い」と言ったんだ。これなんか、路上生活者への差別の最たるものですよ。

偏見や差別の意図がなくても、結果としてそういうものを生み出してしまうこともあります。たとえば路上生活者には発達障害や知的障害が多いという調査結果があるけど、それが独り歩きして、市民の偏見を助長してしまうこともあって、そこに憤りを感じます。

みなさんには、駅とか公園にいる人たちも、以前は家庭や生活があったという、ごく当たり前のことを心に止めてほしい。道行く若い人を見て「自分が親になって子を持っていたら、今ごろこんなすてきな人に育っていたのだろうか」って思っている人もいますよ。



“駅や公園にいる人たちも、以前は家庭や生活があったという、 ごく当たり前のことを心に止めてほしい”

こういうことを知り、想像できるようになるためにも、実際に現場の人たちと接してみて、今の支援に足りないのはこんなところだなんてことを考えて、制度をつくっていく。そんな社会になってほしいです。

そのような社会にするために、具体的に私たちにできることはありますか？

もちろん。たとえば貧しい子どもを支援することを考えてみましょう。

よく学生さんが塾に行けない子どもたちに、勉強を教えてあげたりして学習を支えてくれるということをしてきています。これはありがたいことです。でも、お腹がすいてひもじい思いをしている子たちは、そもそもそんな場所に行きはしません。勉強が終わったらお腹いっぱい食べさせてくれるっていうのをすれば、みんな行くんじゃないかな。

僕もね、したいことがあるのにできなかった経験があります。中学の頃、卓球が得意で、東北大会に行けることになりました。秋田に一泊する予定だったんだけど、母親が「お金がないので、大会に行くのはやめてくれ」って。それで断念したのが、僕の卓球人生（笑）。

本当に貧しいとお腹が空きすぎて勉強も頭に入らないし、スポーツをやりたくてもやれない。**やりたいこと、できたはずのことができなかった子どもたちを支えるような関係づくり**というのが、みなさんのできる社会貢献だと僕は思っています。